平成２６年度「重点研究費」研究成果報告書

研究課題	多文化社会の共生に向けた地理的アプローチ方法の開発 ―海外日本人コミュニティの現地適応に着目して―

研究代表者

氏名	所属	職名
加賀美雅弘	人文社会科学系 人文科学講座	教授

研究分担者

氏名	所属	職名
澤田康徳	人文社会科学系 人文科学講座	准教授
牛垣雄矢	人文社会科学系 人文科学講座	講師

【研究成果の概要】　（文字の大きさ９ポイント・字数 800 字～1600 字程度）

現代世界は多様な地域の間の関係がますます緊密化し，地域の間での人やモノ，情報の流動は増える一方である。そうしたなかで異なる環境，文化の接触機会も増え，異質の文化をもつ人々が安心して暮らすことのできる社会の実現が重要な課題になっている。そのためには異なる環境・文化への理解を深めることが不可欠であり，それゆえに学校教育においても多文化共生に関する学習が重要なポイントになっている。

このような問題意識を背景にして本プロジェクトは，環境・文化・社会の地域的多様性に関心を寄せる地理学の視点から，多文化共生に関する教材の可能性を求めて模索することにした。地域の環境とその把握，それに適応する移動者の行動に着目し，特定の環境をもつ地域がどのようにとらえられ，利用され，あるいは問題をもたらしているかを検討しつつ，地理の教材化の可能性について考えた。

ただし，当初計画した海外日本人コミュニティの現地適応に関する現地調査と，それに基づく考察は，予算規模が大幅に縮小されたことに伴い，実施することができなくなった。そこで本プロジェクトは研究計画を全面的に改め，共同研究者それぞれのこれまでの研究成果を踏まえて，環境への適応・理解・活用という３点を取り上げ，以下のような研究課題に絞った検討を行った。（以下，報告書の執筆順）

１）移動者の環境への適応に関する検討（牛垣雄矢担当）

日本国内における在日朝鮮人の居住とそれをめぐる行政の対応に着目し，日本における外国人が異質の環境にどのような適応しつつあるかを論じた。具体的には，神奈川県川崎市における在日朝鮮人集住地区を取り巻く川崎市の取り組みと，これに対する住民の対応を検討し，その地域的な動向を考察した。

２）地域の環境の学習・理解に関する検討（澤田康徳担当）

地域環境の理解が学校教育において形成・確立されることに着目し，世界各地の多様な環境が以下に学習され，理解されているかを論じた。具体的には，小学校地図帳に掲載された世界各地の写真に着目し，その年代的な変化を追跡することにより多様な自然環境に関する学習のための教材の重要性について考察した。

３）環境の積極的な活用に関する検討（加賀美雅弘担当）

特定の地域環境を評価して有効利用する行為として保養ツーリズムに注目し，移動する人々が優れた環境をどのように認知し，活用しているかを論じた。具体的には，ヨーロッパの気候保養地であるイタリアのメラーンを対象にして，地域固有の自然・文化・社会のいずれがどのように評価されるのかを考察した。

以上の検討は，３人の共同研究者が議論を重ねた結果であり，それぞれが対象にした事例は環境認知・評価・適応といった人間と環境の関係に関する考察をさらに深化させることにつながるものであり，継続した検討が必要である。本プロジェクトの研究成果は，今後も多文化共生に関する議論につなげ，次のステージへと展開させる予定である。

研究成果発表方法

［発表論文名（口頭発表を含む），氏名，学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入する。］

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。
なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。

加賀美雅弘：環境評価の場としての保養地の発達―中央ヨーロッパの気候保養地の事例．東京学芸大学紀要　投稿予定

澤田康徳：小学校地図帳における世界に関する地理写真の内容の変化―自然事象を中心として．日本地理学会春季学術大会要旨集，p.222，（2015年3月，日本大学）　学会発表

澤田康徳：小学校地図帳における世界に関する地理写真の内容の変化―自然環境を中心として．新地理（日本地理教育学会）　投稿中